

2020年7月27日
早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター
国際芸術・学術拠点研究会事務局

第7回国際芸術・学術拠点構想研究会(A&S研究会)
開催記録

日時: 2020年7月7日(火) 18:00-19:30
開催方式: オンライン開催 (Zoom)
出席: 27名
記録: 山田美香

講演: 中嶋聖雄 (早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授)
「シビック・メディアとしての震災アーカイブの多様な試み—311ドキュメンタリーフィルム・アーカイブ、3がつ11にちをわすれないためにセンター、およびリアス・アーク美術館常設展示の事例から」

司会: 秋光信佳

参加者: 27名
国際芸術・学術拠点構想研究会メンバー

研究会代表:
松岡俊二: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授 (環境経済・政策学)
研究会副代表:
秋光信佳: 東京大学アイソトープ総合センター教授 (生命科学)
メンバー:
安部 良: 安部良アトリエ一級建築士事務所代表 (建築)
芥川一則: 福島高等専門学校教授・学科長・副校長 (都市経済学)
青井哲人: 明治大学理工学部教授 (建築史)
船曳 淳: 株式会社三菱総合研究所アライアンス推進室
寿楽浩太: 東京電機大学工学部准教授 (科学技術社会学)
洪 恒夫: 東京大学総合研究博物館特任教授 (空間デザイン)
中嶋聖雄: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授 (文化社会学)
松永美穂: 早稲田大学文学学術院教授 (ドイツ文学&翻訳論)
宮野 廣: 日本原子力学会・福島第一原子力発電所廃炉検討委員会・委員長 (原子力工学)
森口祐一: 東京大学大学院工学系研究科教授 (環境システム工学)
永井祐二: 早稲田大学環境総合研究センター研究院准教授 (環境工学)
小野田弘士: 早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授 (環境システム工学)
山本麻紀子: 京都市立芸術大学構想設計専攻・非常勤講師 (アーティスト)
吉田恵美子: NPO法人 the People 理事長・いわきおてんと SUN 企業組合代表理事

[欠席]

長谷川祐子: 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授 (現代アート)
岡田久典: 早稲田大学環境総合研究センター上級研究員 (地域環境論)
中谷礼仁: 早稲田大学理工学術院創造理工学部教授 (建築史)
坪倉正治: 福島県立医科大学特任教授 (公衆衛生学)

オブザーバー: 9名

事務局:
李 洸昊: 早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科助教
中野健太郎: 早稲田大学大学院環境エネルギー研究科
Yunhee CHOI: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科
朱 鈺: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科
山田美香: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

議題

開会挨拶：松岡俊二（研究会代表）

- ・「中間報告」に向けた個別打合せの経過について報告を行った。

議題 1. 中嶋聖雄（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）

「シビック・メディアとしての震災アーカイブの多様な試みー311 ドキュメンタリーフィルム・アーカイブ、3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター、およびリアス・アーク美術館常設展示の事例から」

- ・今日の報告は、研究プロジェクト「通信とメディアが大災害からの復興と地域社会の再興に果たす役割の解明」（代表 三友仁志教授・2015～2018 年度・国際メディア財団）のサブテーマの 1 つ「リスク社会におけるシビック・メディアの役割」の中からの 3 つの事例を紹介し、学術と芸術の関係への示唆を示し、議論を深めていきたい。
- ・シビック・メディアとは、コミュニティにおいて社会的絆を強化し、住民の間に市民的参加への強い動機を創造する、あらゆる形式のコミュニケーション（MIT）と定義され、リスク社会を生きるために重要な手段であるといわれる。
- ・ベック（1986/1992）『リスク社会』によると、現代社会は産業社会とリスク社会の混合であり、リスクの生産と分配が大きな課題と指摘される。地球温暖化や新型コロナのように社会全ての人々に影響を与え、回避が困難な国境を超えるグローバルな課題（issue）であり、リスクの多くは科学・技術の発展の結果でもある。コストとベネフィットの一義的決定が困難であり、科学的知識や道具なしではリスクの知覚が不能なため、リスク社会における問題を理解し解決するためには、科学的知と社会的知 = 市民的討議が必要であり、シビック・メディアを含む市民社会が重要となり、本日はそこに焦点をあて報告する。
- ・リスク社会におけるシビック・メディアの役割には、情報の共有（例：8bitNews）、災害からの復興と地域社会の再生、アーカイビング（記録+記録の収蔵、例：中国の新ドキュメンタリー運動）がある。このアーカイブの事例として、今日は、東日本大震災をアーカイブする事例を 3 つ紹介する。
- ・ケース 1：311 ドキュメンタリーフィルム・アーカイブ（山形国際ドキュメンタリー映画祭；山形県・山形市）→客観的なバイアスのない、総合的なレファレンスということから アカデミック（学術的）・アーカイブである。
- ・ケース 2：3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター（せんだいメディアテーク；宮城県・仙台市）→市民参加を重視、対話的、非・対立的、コミュニティ形成ということからコミュニティ・アーカイブである。
- ・ケース 3：リアス・アーク美術館常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」（宮城県・気仙沼市）→感情をアーカイブ、批判的・規範的提言、災害をヒトとモノの関係としてとらえること、身体性の強調、フィクションの意図的活用、震災の文脈としての歴史・民俗の重要性を強調する、非・伝統的な、アヴァンギャルド（前衛的）・アーカイブである。
- ・3 つの事例からもアーカイブ活動の多様性がわかる。東日本大震災の影響は今も継続しており、アーカイブの対象自体ムービングターゲットであることを考えると、多様なアーカイブ活動を許容する空間を保証することが、シビック・メディアとしてのアーカイブの役割である。
- ・科学的・客観的ファクトが客観的であるがゆえに、リアリティからかけ離れてしまうことがある、それは、リアリティは社会的に作られる（バーガー/ルックマン、1967/2003、『現実の社会的構成：知識社会学論考』）ということもわかる。そこに、科学・客観・理性 vs. アート・主観・感性というような二元論を越えてゆくことの可能性・有効性を感じるが、科学と芸術は、評価基準も違い、単純に融合ということにはならないだろう。ただし、アーカイブを防災・減災に役立てるというフィロソフィー（洪さんの前回の発表）が共有されている場合には、学術と芸術の協働が大変有効な場合もある（例：リアス・アーク美術館におけるフィクションとノンフィクションの活用）。

質疑および議論

議題 2. 今後の予定：「中間報告」について

- 中間報告に向けた個別打合せをし、その後、TF メンバーを中心にまとめていく。